

農協新聞

土門 剛 どもん たけし



【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

再編加速化も」のサイド記事だ。

日本経済新聞の4月27日付け朝刊が1面準トップで報じた「農林中金、JAへの利払い圧縮へ 四半世紀ぶり改革」の記事。今後の農協経営につながる重要なポイントを含んでいるのに、「利払い圧縮」の予告以外には読むに値しない内容だった。

経済専門紙と名乗っているのに農林中央金庫の都道府県信連や地域農協などに対する預金につく金利の仕組みについて理解したうえで書いているとは思えない。率直な読後感は、農林中金のニュースリリースの予告版を読まされたみたいだった。

噴飯物は、これに関連して経済欄（5頁目）に掲載した「646農協

農林中金の利払い圧縮は農協経営にどう影響するか

事のちようど1カ月前、3月27日付け農業協同組合新聞ネット版が「利払い圧縮」を予告する記事を掲載していたことだ。農協グループの研修会「新世紀JA研究会 課題別セミナー」を伝える記事の中。そのリード部分で「30年度は農林中金からの奨励金が削減される可能性が高く、より厳しい対応を求められます」と書いている。農林中金が、この場を使って「利払い圧縮」の観測気球を揚げてきたのであろう。

農協組合長らが参加する新世紀JA研究会は、農協役員同士で情報交換や課題の共有を行ない、会員相互の研鑽を目指す真面目な勉強会である。役員一覧表を拝見すると、農協系統のオビニオン・リーダー的な農協関係者の集まりであることが何となく分かる。

その日研修会の講師は農林中金総合研究所の古江晋也主任研究員だった。「利払い圧縮」に触れた記述部分は、講師の直接話法では書かれていないが、古江講師がその場で明らかにしたことには間違いない。残念ながら「利払い圧縮」の話題が出たと

きに、当日の参加者がどのような反応を示したかは何も触れていない。「利払い圧縮」の影響は相当深刻なものがあるはずだ。まず農協経営を直撃する。農林中金からの利息で事業を成り立たせているからだ。農協経営の屋台骨が揺らげば農協改革の方向も変わってくる。何よりも重要なことは、農林中金の将来方向も変わってくるはずだ。信連との経営統合、そして農協の信用事業分離にも重大な影響を及ぼすことは確実だ。

農林中金の利払い圧縮で農協経営は窮地に陥る

さて、本題に入る。日経記事のポイント部分、農林中金がJAへ支払う利息を「現状の0・6％程度から0・1～0・2％圧縮」を実現した場合の農協経営へ与える影響のシミュレーションから切り出してみた。材料にしたのは週刊ダイヤモンド誌の農協ランキングでトップになった富山県のJAみな穂（細田勝二組合長）である。

最新のデイスクリージャー誌（2016年3月期）によると、9410人（正組合員5572人）の組合員から集める貯金は954億円。農協の平均像に近い貯金高だ。ちなみに総合農協統計表では15年度1029億円。表1は、JAみな穂の資金

表1：JAみな穂 資金運用収支の内訳
(単位：億円)

	平均 残高	%	利息	%	利回り
資金運用 勘定	911.5	100.0	7.4	100.0	0.82%
預金	810.3	88.9	5.4	73.0	0.67%
有価証券	2.7	0.3	0.01	0.10	0.49%
貸出金	98.4	10.8	2.0	27.0	2.06%
預証率	87.8%				30.1%

同農協2016年3月期のディスクロージャー誌から

運用状況である。

「系統預け金」と呼ぶ農林中金への預金は平均残高ベースで810億円だった。資金運用額(911億円)の実に9割近くがその系統預け金での運用になる。日経新聞が「奨励金」と書いた利息は5億4000万円。運用利回りは0.67%になる。記事にある「現状の0.6%程度」という数字と符合する。

農林中金による利払い圧縮が実現した場合、0.1%圧縮のケースで8103万円、0.2%圧縮なら1億6200万円が減ることになる。ちなみに信用事業の利益は6億1322万円だった。

これがどれだけ大変か。JAみな穂の人員費でみてみよう。この農協の従業員数は245人。それに要す

る人員費は、同ディスクロージャー誌では、約11億7700万円だった。1人当たり約480万円になる。0.1%圧縮した場合で16人分、0.2%圧縮なら33人分の金額だ。

農協経営の現状からすると、これだけの利益を他の事業で稼ぎ出すことは至難の業。そんなことをしたら組合員農家のさらなる農協離れを助長する。減益分や損失分などを農家に押しつける農協の得意芸、マークアップ的なやり方で手数料や経費の増額で帳尻を合わせようとしても、これまた至難の業。職員の給与に手をつけようとしたら全職員一律に7%から14%の人員費カットを断行しなければならぬ。

ちなみにJAみな穂の組合員への貸出は資金運用の1割しかなかった。これで得た利息は2億円だ。利回りは2.06%になる。資金運用額全体の利息収入は7億4000万円だから、1割の運用資金で利息の3割近くを稼ぎ出す。常識では貸出を伸ばした方が農協経営にプラスのはずだが、それが能力的にも制度的にもできない。農林中金へ預金すればノー・リスクで0.6%程度の利回りが保証されるので、貸出を増やそうという考えにもならないようだ。思わず補助金漬けで意欲を失ってしまふ農家をイメージしてしまった。

この農協を選んだことは正解だった。富山県にあった信用農業協同組合(信連)は、04年に農林中金と統合しているの、県内の農協は農林中金と直接結びつくことになった。農林中金の方針がストレートに伝わるので、「利払い圧縮」の影響を正確に探ることができるところだ。

経営戦略ツールとして使われるプレミアム金利

日経新聞の記事を読んでいて混乱するのは、農林中金に預ける預金につく利息の仕組みだろう。記事は、「奨励金」と呼ばれる預金金利と書いているが、正確には、通常の利息分があつて、これに奨励金がつくのだ。その名の通り、金融情勢や農林中金を取り巻く経営環境によってつくプレミアム金利のことである。たとえば農林中金が、運用のため資金を増やしたいと思えば、奨励金を増やしたりするのだ。

JAみな穂のディスクロージャー誌にも、資金運用収支勘定の項目に、「農林中金への」預金には、農林中金からの事業分量配当金等が含まれています」という注釈がある。

事業分量配当金とは、この場合は、預け入れ額に応じてつける配当のこと。ここから浮かび上がってくるのは、本来の利息のようなものにプレ

ミアム金利を上乗せした重層構造になっていることである。その上乗せ部分は、他の農協のディスクロージャー誌には、「奨励金など」と書いた表現もあった。

ところが滋賀県信連のディスクロージャー誌には、資金運用収益の説明で「『うち預け金利息』には、受取奨励金及び受取特別配当金が含まれています」という記述がある。これに従えば、通常の利息が1階部分とすれば、2、3階部分に「受取奨励金」や、出資配当の一つ「受取特別配当金」があると受け取れる。

ここで整理すると、一般的に奨励金と呼ばれる預金に対する金利は、甲種・乙種という種類があるようだ。甲種は、信連なり農協が預けてよい預金に対して支払われる奨励金。乙種はそれを超えた預金につく奨励金だ。金利の高低ということでは前者が高い。ただ具体的な数字は分からない。これに加えて運用実績に応じた特別配当もある。これは出資配当とは違う性格のものである。

農林中金は、経営戦略上、信連や農協に払う奨励金や配当の身をブラックボックスにしている。別段、公表すべき性質のものとは思われないが、資金調達の重要なツールの一つと位置づけている。信連や農協から預金を集めたいときには、先に説明

辛聞 上門

アが好んで使う表現だ。農林中金がどんな金融機関かを説明するのに、メガバ

く。とくに後者は、最近、メディアが好んで使う表現だ。農林中金がどんな金融機関かを説明するのに、メガバ

た話ではない。利息の呼び方が信連や農協によってマチマチなのは、あまり褒められ

なぜ農林中金は高金利が支払えるのか

一般読者が、この記事を読んでもっとも驚くのは、系統預け金につく利息の高さだろう。銀行がこの種の大口預金につけるとしたら、5年ものでせいぜい0・3%程度の金利。

表2：農林中金・三菱UFJ銀行の経営比較 (2016年度)

	農林中央金庫	三菱UFJ銀行
総資産	61兆9042億円	204兆1905億円
経常利益	2133億円	6322億円
総資産利益率	0.21%	0.30%
預貸率	21.1%	59.3%
預証率	87.8%	30.1%
自己資本比率	24.39%	15.66%
運用利回り	1.20%	0.83%
従業員数	3601人	3万5214人
平均年齢・勤続年数	39.1歳・13.7年	37.8歳・14.5年
平均給与年額	649万円	787万円

注：自己資本比率は国際基準。資料＝農林中央金庫：https://www.nochubank.or.jp/ir/disclosure/pdf/disc_17_7.pdf／三菱UFJ銀行：<https://www.mufg.jp/ir/securityreport/2016mufg/pdf/mar/ymtmu16.pdf>

表3：農林中金・三菱UFJ銀行の運用利回り比較

年度	農林中金	三菱UFJ銀行
16	1.20	1.00
15	1.11	0.92
14	1.24	0.96
13	1.05	0.95
12	0.96	1.06
11	0.99	1.14
10	1.06	1.24
09	1.17	1.42
08	1.92	1.98
07	3.43	2.24
06	3.46	2.02
05	2.42	1.70
04	1.68	1.41
03	1.50	1.50
02	1.55	1.78
01	1.89	2.39
00	2.18	2.52

注：三菱東京UFJは06年1月、三菱UFJは18年4月に発足。01～06年度は東京三菱銀行時代の数字、00年度は全店ベース。

ンクでトップの三菱UFJ銀行（18年3月までの行名は三菱東京UFJ銀行）と経営比較をしてみた（表2）。まず着目していただきたいのは、預貸率と預証率だ。預金残高に対する貸付金、そして有価証券類での運用比率を示したものである。預貸率では三菱UFJ銀行がトリプルスコアぐらいの差で貸付金が多い。逆に預証率では農林中金が同じくトリプルスコアに近いぐらい有価証券類での運用が多い。新聞や雑誌が「機関投資家」と形容句をつけるのは、このためだ。

大きく違う点があるとしたら従業員数だ。三菱UFJは、約3万5000人なのに、農林中金は、その約10分の1。農林中金にリテールがないことを示す数字だ。そのリテールは信連や農協などが引き受けているのだ。運用利回りにも着目していただきたい（表3）。取り上げたのは、00年度以降、直近の16年度までの17年間。ホームページで検索可能な最大限の期間だ。農林中金の利回りは図抜けている。やはり投資銀行と商業銀行の差が出ているようだ。

とところが不思議なことは、総資産に対する経常利益率が三菱UFJ銀行より低いことだ。ここから浮かび上がってくるのは、農林中金は、稼いだ利益のかんりの部分を信連や農協などへの利払いに充てているという構図だ。日経新聞が書いた「0・1～0・2%圧縮」というのは、世間並みとは言わないが、それに近い水準にまで利息を下げさせて欲しいという期待願望を示しているのだから。

今回の利払い圧縮は、機関投資家としての農林中金の資金運用に制度疲労のよくなものが出てきたということか。運用資産の4分の

農林中金の無責任ぶりは、記事を読む限り、利回り低下による負担を系統預け金に対する奨励金を下げることで対応しようとしている点だ。本来なら、随より始めよの精神で、まず農林中金自体のリストラを含めた対応策を示すことではないかと思う。それに触れずに、いきなり顧客であるはずの信連や農協などにリストラの手を打てというのは、いかにも農林中金らしい横着なやり方だ。